

聖書：ピリピ 1：12～18

説教題：キリストが宣べ伝えられている

日時：2016年11月13日（朝拝）

ピリピ教会は最初の日から福音を広めることに献身して来た教会でした。彼らはパウロを祈りと物質的支援の両面から支えて来ました。このローマ投獄時も、エパフロデトを送ってパウロを支援しました。そのエパフロデトを送り返す際、パウロは自分の近況も彼らに知らせます。そのことが今日の箇所から記されています。ピリピ人たちはもちろんパウロの身を案じていました。キリスト教会の第一人者パウロが捕らえられて今どうなっているのか。獄中でどんな状況にあるのか。沈んでいないか。気落ちしていないか。しかしパウロは獄中で、私は喜んでいる！というレポートをここに記します。

まず彼が伝えていることは「私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになった」ということです。普通に考えるなら、使徒パウロが捕らえられたということは、キリスト教会にとっては危機的な状況だと考えられます。神の声を取り次ぐ特別の器が鎖につながれて、神のメッセージは窒息させられるのではないかと。ここまで進展して来た世界宣教も終息させられてしまうのではないかと。しかしパウロは「全然そうではないことをあなたがたに知ってもらいたい。かえって福音は前進している！」と言います。この「前進する」という言葉は、軍隊が道なき所に道を作って突き進んで行く様子を表す言葉です。どんな障害物があっても、それらを乗り越え、突き破って進んで行く様子を表す言葉です。そのごとくに福音は何にも妨げられず、いよいよ進展しているとパウロは言うのです。

まず新しい人々の間に、すなわち外部の人々に向かってそれは前進しました。13節に「親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり」とあります。この親衛隊とはローマの親衛隊のことだと思われます。ローマ軍の中でも選りすぐりの精鋭部隊、エリートたちだったと思われます。その人々の間で、イエス・キリストの福音は大評判になった。これはおそらく、彼らがすぐにパウロが普通の囚人ではないことに気がついたからでしょう。普通、牢屋に投げ込まれた人は、嘆き、悲しみ、怒り、絶望し、中には自暴自棄になったり、狂ったようになる人たちもいたでしょう。しかしパウロは違いました。親衛隊の兵士たちは思ったでしょう。「我々はいまだこんな囚人を見たことがない。あの彼の落ち着きぶり、平静さ、外側に溢れ出て来る平安は何を意味するのか。」そうして彼らの特別の関心を引いたに違いないのです。

そして彼らは調べている内に、このパウロは「キリストのゆえに投獄されている」ということを知るようになりました。罪を犯してここにいるのではない。イエス・キリストという人に関係して、ここに送られて来たようだ。彼をこのようにあらしめている秘訣は、キリストにあるようだ。そしてパウロに関わる兵士たちは、ある程度の時間交代で番をしていたでしょう。それによって次々に違う兵士たちがパウロに接するようになりました。そのためパウロの話、いやイエス・キリストについての話は、兵士たちの中心的な話題の一つとなり、ついには親衛隊全員にまで知られるようになったのです。そしてさらに他の多くの人にもまで広がることとなったのです。パウロはここに神の奇しい導きを見ました。自分が囚人となることがなければ、こうして福音がローマの親衛隊の中にまで入って行くことは考えられなかった。このことでかえって福音が前進している！と。

また教会内の人たちに対しても良い結果をもたらしたことが 14 節に記されています。すなわち兄弟たちの大多数も、このパウロの姿に接して奮起させられた。牢屋の中に閉じ込められている人があのように勇敢に主を宣べ伝えているのに、外にいてより自由な自分たちが今の状態のままでいていいのだろうか！と。彼らはパウロの姿に大いに刺激されて、本来あるべき歩みへと駆り立てられたのです。しかしパウロは「私が彼らに力を与えた」とは言っていません。14 節に「主にあつて確信を与えられ」とあります。彼らを強めたのはあくまでキリストです。確かにパウロの姿に触発されたのですが、彼らは自分たちが持っている信仰をもう一度点検し、何よりも主とのつながりによって、主との交わりによって、パワーアップされたのです。そして恐れることなく益々大胆に神の言葉を語るようになった。こうして私の投獄によってかえって福音は前進している！とパウロは言っているのです。

私たちはここに、何がどう用いられるかは分からないことを改めて教えられます。大事なリーダーが牢屋にぶち込まれることには何の良いこともないように思われます。それはただみじめで、悲惨で、恥ずかしいことのように思われます。しかしそこから考えられないような素晴らしい結果が導き出されました。ですから私たちも人間的に思わしくない状況にあるからと言って、それだけで気落ちする必要はないのです。むしろ神はそこからどんな良いものを取り出されることか。あの創世記のヨセフ物語を考えてみてもそうでしょう。神は悪から善を取り出すことができになる方。私たちはそのような目で自分の状況も見たいと思います。たとえ思わしくない状況にあるとしても、神はここから私の目にはまだ隠されている良いものを取り出してくださることができると神を見上げて、神に信頼し、従う歩みをささげて行きたいのです。

さてパウロは自分の投獄が良いことのために用いられていると、まず報告しましたが、単純に喜ぶことばかりがあったのではないことが、15 節以降から分かります。兄弟たちの大多数は奮起して福音を語るようになりました。しかし人々の中には、実際は 2 種類の人々がいたようです。その一つはねたみや争いをもってキリストを宣べ伝えている人々で、もう一つは善意をもってキリストを伝えている人々です。このねたみや争いをもってキリストを伝えている人とは誰のことでしょうか。17 節にもう少し説明されていて、彼らは純真な動機からではなく、党派心をもってキリストを宣べ伝えているとあります。つまりこの人々はパウロに良い感情を抱いておらず、むしろ敵対心を持って、パウロと張り合おうとしていた人々です。詳しい背景は分かりませんが、彼らはパウロの個人的反対者たちであり、パウロを何らかの意味で面白くないと思っていた人々なのでしょう。もしかするとこれまでこの地で有力視されていたグループの人たちだったかもしれません。そんな彼らにとってパウロがやって来て、人々の評価を勝ち取っていることが面白くない。親衛隊の間で評判となり、兄弟たちの心を燃え立たせているのを見て面白くない。そのことをねたみ、党派を組んで、彼らはパウロに対抗し、より多くの成功を収めてパウロを打ち負かそうとした。パウロに悔しい思い、苦々しい思いを与えてやろうとした。自分たちは今、牢屋の外で自由であるというアドバンテージを使って、牢屋の中で自由に活動できない彼をイライラさせ、がっかりさせようとした。

パウロはこの人たちについて、そのメッセージが間違っているとは言っていません。15 節でも 17 節でも「キリストを宣べ伝えている」と言われています。パウロは異端的な教えに対しては激しく戦った人です。しかしそういう問題があることは示唆されていません。つまりパウ

ロをライバル視していた人々は、メッセージは正統的だが、福音を伝える動機が正しくない人々だったということです。もう一方の人たちはパウロを使徒として認め、愛をもって福音を伝えましたが、こちらの人たちは勢力争いが動機となっていた。自分たちのグループを大きくして、パウロを悲しませてやろう、落胆させてやろうとしていた。

実にパウロは現実にはこのような苦しみの中にあっただけです。彼としては教会外からの攻撃や迫害がある分、せめて内部の人たちとは、励まし合い合い、支え合いながら信仰の戦いを戦いたいと願ったでしょう。そして私たちはパウロなら、すべての信者から賞賛され、尊敬された人だったと想像するかもしれません。しかし現実はそのようではなかったのです。同じ福音を伝えるいわば同労者の間に、パウロと張り合い、パウロをやっつけようという心で宣教に励む者もいた。パウロが失敗し、パウロが残念がる姿を見たいと思って活動する人々にも囲まれていたのです。

しかしパウロは何と言っているのでしょうか。18 節：「すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいきます。」パウロは不満や愚痴をこぼしても仕方ないから、何か感謝できることはないかと考えて、キリストが伝えられていることを喜ぶと言って、自分の気持ちを治めているわけではありません。そうではなく、この 18 節は、パウロが何を一番自分の大切なことと考え、日々生きているのか、彼の優先順位あるいは価値基準についてあかししている言葉です。彼が願っている一番のことは、キリストの御名が宣べ伝えられ、また信じられ、またあがめられることでした。この目標が達成されるなら、第二、第三の事柄に属するようなことはある意味でどうでもいい。自分のメンツとか、人々の私に対する対応とか、牢屋の中に今自分が置かれていることとか、そういった自分に関することはさして重要ではない。それよりもキリストの福音が人々の間で力強く宣べ伝えられている。このことを私は心から喜んでいて、と獄中からあかししているのです。

このパウロの言葉に接して私たちが問われるのは、では私はどうなのかということではないでしょうか。私は何を自分の喜びとして生活しているか。何を一番求めて生きているか。パウロのようにキリストが宣べ伝えられることを一番の願い、また目標にしているか。そしてその下に、他のすべてのことを従属させているだろうか。私たちは自分を振り返ると、つい自分のメンツが傷つけられたとか、ひどいことをあの人に言われたとか、不当な扱いを受けたということで怒り、争い、張り合うことに一生懸命になっていることはないでしょうか。果たして私の優先順位は正しく整理されているでしょうか。

私たちはこの 18 節をパウロにだけ当てはまるものとして読むべきではないと思います。「パウロはすごいね～、でも私はそこまではいかない！」と言って終わりにしないようにしないでほしい。これはキリストの愛を知り、その救いを受け取ったすべての人に見られるべき自然な姿でしょう。I コリント 6 章 19～20 節：「あなたがたのからだは、あなたがたの内に住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」私たちはキリストの尊いいのちという代価を払って買い取られた者たちです。もはや自分のものであるべきではないのです。私たちは神のもの、キリストの

ものです。とすれば私たちの残された地上の生涯はキリストのためのもの、キリストが宣べ伝えられるためのものではないでしょうか。次回見るピリピ書 1 章 20 節でパウロは私の切なる祈りと願いは「生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです」と語ります。これはキリストの愛を知ったすべての人のごく自然な感情でしょう。ですから私たちもこのことを自分の一番大切な願いとして生きるべき者たちではないでしょうか。そしてこのために自分がいくらかでも用いられることが最も意味ある人生のあり方であり、また主の愛にお答えする歩みなのではないでしょうか。

では私たちはどこでそのような生き方ができるのでしょうか。私たちはあかしというと、自分の状況が良く整えられてからでないとできないと考えがちです。人様の前で恥ずかしくない生活レベルに達したら、ある程度、胸を張れる状況に達したら、初めてあかしができる。しかし今はまだとてもそんな状態にはない。今の苦しい状況を乗り越えて余裕が生まれたら、あかしも積極的にしたい、と。しかしパウロのあかしはどこでなされたでしょう。それは牢屋の中でした！人間の目で見れば最悪の状況においてでした。そしてそこで彼が持つキリストの光は輝きました。とするなら私たちがたとえどんな状況にあろうとも、そこで主の光を輝かせることはできるのではないのでしょうか。むしろその一見難しい状況においてこそ、キリストを知る信仰の光は効果的なあかしとなるのではないのでしょうか。

問題が解決し、生活に余裕が出て来たら、良いあかしにも取り組もう！ではないのです。私たちは自分が今、置かれている状況の中で、キリストに感謝し、キリストの愛に答えて歩むようにと招かれています。牢屋にあったパウロを神がこのようにお用いになったことを思うなら、私たちが置かれた場での生活を神が用いて何をしてくださるかは私たちには分かりません。そこからどのような形で福音の前進が導かれるか、言い当てることはできません。神は私たちを用いて、そのことをしてください。私たちはその神を仰いで、パウロのように「この身を通してキリストが宣べ伝えられること」を第一の願いとして、今週も歩みたいと思います。そこに私たちの主に対する愛と感謝を現わすことができますように。そして「キリストが宣べ伝えられる」という一番の目的に生かされる真に幸いな人生のあり方、その日々の歩みへ導かれたいと思います。